

# 教師夏目金之助の研究（十三）

## —「自己本位」の原理—

森 下 恭 光

### 緒 言

夏目金之助という人物を理解する上で、彼の思想や生活の根底に貫かれている原理ともいべき「自己本位」という考え方についてその意味を明らかにすることが必要である。

このことばは、彼が『私の個人主義』と題して学習院補仁会主催の講演会で用いたことにより、広く知られるところとなった。しかもそれが夏目の信条のような形で提示されたため、彼の思想や生活、そして作品理解の上でも鍵になることばとして考えられるようになっている。

そこで、本論では、夏目の教師としての特質を明らかにする上でも必要とされるこのことばの意味をそれが用いられる場面や彼の著述、講演などを通して明らかにすることを目的として検討を進めて行く。

—

「自己本位」ということばは、国語辞典には扱われていない。すなわち国語辞書的な解説をしにくいことばのようである。その解説を試みているのが吉村善夫の『夏目漱石』である。

吉村は「自己本位」の用語法を検討し、「他人への雷同を排して、自分の独自の立場から判断し行動することを意味する場合と、他人のことは顧慮せずに、自分のためだけを計るエゴイズムを意味する場合とがある。そして前者は誉められ、後者はけなされる。両者は明らかに別物である。それが自己本位という同じ一つの名で呼ばれるのである。漱石の「自己本位」にもこの両者が混在していた。そして漱石はそのことに気がつかなかった。」<sup>(1)</sup>とする。

吉村によれば、夏目の「自己本位」は主我主義で、しかも、その主我主義はエゴイズムの形をとらなかったが故に「自己本位」の持つ二つの意味の混在に彼自身気がつくことができなかったというのである。

ここでエゴイズム (egoism) という語義を英和辞典により簡単に見ておくと、「①利己主義、自己本位。②自負心。うぬぼれ。③利己説。」<sup>(2)</sup>とあり、中でも利己主義という訳語が多く用いられる。それは金銭、権力、名誉などいわゆる世俗的名利に貪欲であることを意味する。そのような一般的意味でのエゴイズムと夏目の主我主義とは対極にあることはよく知られているところであり、夏目もそれを自認していたことが吉村のいう「混在に気がつかなかった」ことにつながる。

そこで、「自己本位」ということばの一般的意味とそれが夏目によって用いられ実行されることになる場面でのあらわれ方がどのようなものになったかを見て行く手続きとしては、その主張が端的に示されているところの、彼自身の著述を検討することから始めるのが適当であると考ええる。

その意味において、まず取りあげるべきものとしては、彼の作家としての信条の宣言から始まる『文展と芸術』があげられる。

大正元年十月に『東京朝日新聞』に連載した『文展と芸術』の冒頭に、夏目は「芸術は自己の表現に始まって、自己の表現に終るものである。」<sup>(3)</sup>と宣言して、論述を展開している。この信条を他の言葉で言い換えると次のようになると彼は言う。

「芸術の最初最終の大目的は他人とは没交渉であるという意味である。中略。他人を目的にして書いたり塗ったりするのではなくって、書いたり塗ったりしたいわが気分が、表現の行為で満足を得るのである。」<sup>(4)</sup>

そのような芸術は、「取も直さず『特色ある己』を忠実に発揮する。」<sup>(5)</sup>と、夏目は考える。この一文は文展を観覧した一人としての講評であるため、多くの紙面は個々の作品についての講評で構成されている。ただ、講評している自身も文芸作家であるから、内容は文展の作品を講評することを通して自己を語っていることになる。その意味において注目されるのである。

この一文に注目した瀧澤克己は、その著書『夏目漱石』において、「漱石の求めて已まなかったものは、唯一つ、本来の彼自身であること、若しくは、本来の彼自身となることであつた。」<sup>(6)</sup>と述べ、結論的に言えば、夏目がロンドンで握つたという「自己本位」の持つ意味とは、「問題の解決であるよりも寧ろ問題の設定—他人（社会）と自分、西洋と東洋、英国と日本等、諸々の問題の根本に横たわる、自己そのもの、問題を生涯を賭けて解決しようとする堅い決意—」<sup>(7)</sup>として解釈すべきものであるとする見解を示している。

夏目が「自己本位」ということばを用いることは、頻繁に行われたわけではない。しかし、彼の思想や生活の原理として働いているものとしては、随所に見ることができる。時には誤解されることもあった夏目の「自己本位」の原理は、まず、その身边に居て、深く夏目にかかわった者の見解から見て行くこととする。

夏目の「自己本位」の姿勢が、彼と身边に接した者達に対してどのように現れていたかについては、その典型を森田草平がその著書『夏目漱石』に記した次の内容に見ることができる。

「木曜会—そんな会の名がある訳ではないが、木曜日の面会日に先生の書齋へ集まって来る若い学生と先生との間に、議論風発、めいめい勝手なことを云い合つて、夜の更くるを知らなかったのは殆ど毎週のものであつた。先生は大学は嫌いであつたけれども、学生は好きであつた。そして、若い者にも云うだけのことは云わせるひとであつた。自分の主義主張とか乃至気分とか、傾向とかいうものに嵌つたことでなければ云わせないのが、通例先輩なるものの癖である。従つて若い者の方でも、どうしてもそれに迎合して行く傾きがある。先生はそれは嫌いであつた。迎合されることが嫌いなだけに、先生の方でも若い者の氣に食わん所はびしびし遣付けられた。」<sup>(8)</sup>

森田は、寺田寅彦、小宮豊隆、鈴木三重吉等と共に、いわゆる夏目門下生を代表する一

人である。ここに引用した文中にあげられている木曜会と通称される面会日だけでなく、彼が夏目と接触する機会はかなり多く、しかもその密度も濃いものであっただけに、その指摘には説得力がある。中でも、筆者が傍点を付けた箇所は、夏目の「自己本位」が持つ根本的性質に触れるものとして注目される。

夏目の「自己本位」は他者を無視しての自己主張ではなく、自己を主張するように他者の主張も認めるという性質のものであったから、ここにあるように、「若い者」すなわち門下生の主張を自由にさせながら、自己の主張もするという姿勢をとっていたことにその特色を認めることができる。

森田のこの指摘にさらに意味を添えるのは、木曜会という複数の人間、しかも、かなり多数の人間の集合する場面を取りあげていることである。

夏目が「自己本位」という四文字を公の場で用いたことにより、その意味が問われる契機になったということで注目されるのは、大正三年十一月二十五日に学習院輔仁会で行った『私の個人主義』と題する講演である。この講演の主旨は、夏目の考える個人主義の意義を次世代を担うことが期待される学習院に学ぶ青年達に伝えることにあった。

それは、英文学を専攻し、教職に在職のままイギリスに留学し、その研究に専念する経験（明治三十三年より同三十五年まで）を経て、やがて教職を退き、朝日新聞社に入社し、文学創作に専念する生活に入り、（明治四十年四月）代表作の一つとして教えられる『こころ』を発表した直後に行われた講演で、彼にとっては晩年にあたる時点で表明された「自己本位」ならびに個人主義に関する所信である。

この中で彼は、ロンドンにおける留學生活を送る自分の立場を、日本人というイギリスにとっては外国人である身で英文学を専攻する点において「他人本位」とでも言うべきものであったと述べている。彼によれば、「他人本位」とは「自分の酒を人に飲んで貰って、後から其品評を聴いて、それを理が非でもそうだと仕舞う所謂人真似を指す」<sup>(9)</sup> のように不本意な立場を取りつづけるわけに行かないと反省した夏目は、「文芸に対する自己の立脚地を堅めるため、堅めるというより新らしく建設する為に、文芸とは全く縁のない書物を読み始めました。一口でいうと、自己本位という四字を漸く考えて、其自己本位を立證する為に、科学的な研究やら哲学的的思索に耽り出したのであります。<sup>(10)</sup>」と、「他人本位」から「自己本位」へと立脚地を変えて行く過程を述べている。

不安定で、依りどころとならない「他人本位」の立場から「自己本位」の立場に移ることにより夏目は、確かな立脚地を獲得することになった。彼はいう、「私は此自己本位という言葉を自分の手に握ってから大変強くなりました。彼等何者ぞやと気概が出ました。今迄茫然と自失していた私に、此所に立って、この道から斯う行かなければならないと指図をして呉れたものは実に此自我本位の四字なのであります。」<sup>(11)</sup>

夏目のこの変化に大きな役割を果たすことになった人物として小宮豊隆は化学者池田菊苗をあげている。小宮によれば、「漱石がロンドンで池田菊苗に会ったという事は、漱石の生活にとって、一大事件であった。漱石はその為め『文学論』著述の一念を発起するとともに、外国文学に対する漱石の「他人本位」が「自己本位」に変わる事が出来たからである。」<sup>(12)</sup>

ここにあげられている池田菊苗は「味の素」発明者として知られる化学者で、明治

三十四年五月、ベルリンよりロンドンに移り、約一ヶ月半にわたり夏目と同居する。この間の交流のようすを夏目は、ベルリンに滞在中の藤代慎輔に宛て送った明治三十四年六月十九日付の書簡の中で次のように伝えている。

「目下は池田菊苗氏と同宿だ同氏は頗る博学な色々の事に興味を有して居る人だ且つ頗る見識のある立派な品性を有して居る人物だ。」<sup>(13)</sup> このことを示すように、夏目は同年五月五日に池田の来訪をその日記に記しており、以後、連日のように池田氏との交流のようすを告げる記事が見られる。その池田が夏目の許を去るのは六月二十六日であった。<sup>(14)</sup>

このようにして「他人本位」から「自己本位」へと移ることにより激的な変化、すなわち「私は此自己本位という言葉を自分の手に握ってから大変強くなりました。彼等何者ぞやと気概が出ました。」<sup>(15)</sup> というような変化が起きたのである。

しかし、この思想の原理とでも呼ぶべき「自己本位」の立場を獲得した夏目の精神も現実には決して安定を得る状態に入っただけではなかった。留学中には激しい神経衰弱に苦しみ、それは帰国後もつづくことになる。そのことは、講演の中で彼自身が告白している<sup>(16)</sup>。それでもなお「自己本位」の立場は彼の中で変わることなく持続されていく。そのことを彼は次のように述べている。「然しながら自己本位という其時得た私の考は依然としてつづいています。否年を経るに従って段々強くなります。著作的事業としては、失敗に終わりましたが、其時確かに握った自己が主で、他は賓であるという信念は、今日の私に非常の自信と安心を与えて呉れました。私は其引続きとして、今日猶生きていられるような心持がします。」<sup>(17)</sup>

ところで、夏目が「自己本位」という立場を「他人本位」の立場から脱して執る契機になったものとして『文学論』の著述があげられることは先にも小宮豊隆の指摘を紹介したところで触れたとおりであるが、夏目自身のその点に関する記述を次に見ておきたい。

夏目は、明治三十九年十一月の日付けで『文学論』の序を記している。『文学論』著述の経緯が記述されている箇所では、「根本的に文学とは如何なるものぞと云える問題を解釈せんと決心した」<sup>(18)</sup> 時から彼は留学期間の残された約1年間をこの問題に関する研究にあてたことを告白している。その研究ぶりは彼自身の言葉によって表現するならば、「此一念を起してより六七ヶ月の間は余が生涯のうちに於て尤も鋭意に尤も誠実に研究を持続せる時期なり。」<sup>(19)</sup> という程のものであった。しかし、皮肉にも、そのことにより文部省に対する報告が不十分であるとされ、譴責を受けることにもなった。この序文の終末に近いところで、著者としてこの刊行物が未定稿であることをことわった上で、それでも刊行する意図として次のことをあげている。

「世の此書を読む者、読み終りたる後に、何等かの問題に逢着し、何等かの疑義を提供し、或は書中云えるものよりも一步を進め二歩を拓きて向上に路を示すを得ば余の目的は達したりと云うべし。学問の堂を作るは一朝の事にあらず、われは只自己が其建立に幾分の労力を寄附したるを、義務を果たしたる如くに思うのみ。」<sup>(20)</sup>

ここに吐露されている著者の思いは、決しておだやかなものではない。この著述をなすために費やされた労力が一通りのものでないことが記されていること自体、著者の自制心を越える思いがあったことを推測させる。そこには、その時点、すなわち明治三十年代の終わり頃におけるわが国における文学論のレベルをはるかに越えるものを自分はここに提

示しているのだと言わんばかりの自負心がうかがえるのである。そこが小宮の言う夏目の「自己本位」の立場に立つ『文学論』という指摘につながるものであると解される。

文部省から遣責の意を含む書状を受ける事態を迎える程の深刻な精神的消耗を経験し、白紙の報告を送ったことから発狂の噂が広まるところまで言った上<sup>(21)</sup>での帰朝とその後の教師生活、そして数篇の創作という多忙な生活の中で平行して進められた著述であっただけに『文学論』に向けられる彼の想念が一層強いものになったのは止むを得ないものであったとも言える。

しかし、彼のそうした想念とは別に『文学論』に示された彼の文学についての論説がどれ程理解され、評価されたかは別の問題として考えられなければならない。東京帝国大学英文科講師として明治三十六年九月から「文学論」を開講し、明治三十八年六月に講了した彼の講義に対する評価（学生による）は必ずしも彼を満足させるものではなかった。

その間の事情を小宮は次のように記している。彼の講義が不評であった原因で「一番重大な原因は、漱石が大学の学生のレベルを非常に高いものに考え、自分にとって最も興味のある問題を、そのまま学生の前に開陳しようとした為に、その講義は、恐らく学生の耳に這入っても、心には沁み入る事がなく、従って「ワカラナイ」という声になった。」<sup>(22)</sup>というのである。

彼の講義が不評であったというのは事実として認められるとしても、その原因が小宮の分析する通りであったかどうかは簡単に論断することはできない。

とも角、この時期における夏目の精神状態は一種の興奮状態にあり、それが序文の中にも自然な形で吐露されていると考えるのが妥当なところであろう。ある意味では、夏目の「文学論」は講義においても著述の上でもその原理として「自己本位」が貫かれていたのである。

## 二

さて、「私の個人主義」と題する講演の前半（夏目は第一篇と言う）<sup>(23)</sup>では、いわゆる「自己本位」という立脚点の意味と、それを自分が獲得して強くなり、自信と安心を与えられ、現在に至っていることを述べている。そして、今迄論述してきたことは、彼のいう「自己本位」の立脚点を獲得するに至る経緯をイギリスの留學生活中の夏目の体験と思索、その結実として生まれた『文学論』を見ることによる跡付けである。

つづく後半に彼が述べているのは、題目にもなっている個人主義にかかわることで、将来、社会の上流階級に位置することになるであろう学習院に学ぶ学生達という聴衆を特に意識した内容である。

第一の内容として彼があげているのは個性が発展させられる場の発見が必要であるということである。彼のことばを借りるなら、「自分とびたりと合った仕事を発見する迄邁進しなければ一生の不幸である」<sup>(24)</sup>

しかし、ここで彼は次のことを言い添えることを忘れていない。すなわち「自分がそれ丈の個性を尊重し得るように、社会から許されるならば、他人に対しても其個性を認めて、彼等の傾向を尊重するのが理の当然になって来るでしょう。それが必要でかつ正しい事と

しか私には見えません。」<sup>(25)</sup> というわけである。

第二にあげているのは、権力あるいは権利と義務の関係である。この場合も聴衆は学習院関係者であって特権階級に属する者が多いとの意識が働いており、最初に権力ということばが出て来る。その権力は「自分の個性を他人の頭の上に無理矢理に押し付ける道具なのです。道具に使い得る利器なのです。」<sup>(26)</sup> と、それが持つ強制力がばあいによっては不当な圧力になることを、権力を行使する立場に立つことが将来的に予想されることが多いと考えられる聴衆に対して警告の意味を込めて述べている。

権利ということばについては、教師という立場に伴う権利と義務の関係として、次のように例示している。「貴方がたは教場で時々先生から叱られる事があるでしょう。然し叱りっ放しの先生がもし世の中にあるとすれば、其先生は無論授業をする資格のない人です。叱る代りには骨を折って教えて呉れるに極っています。叱る権利をもつ先生は即ち教える義務をも有っている筈なのですから。」<sup>(27)</sup>

ここで、学生が教育を受ける権利と義務を負う面を持つことに触れていないのは、夏目の意識には、学生にとっては権利の主張とか行使という観念がこの時点においてはなく、したがって、それに伴う義務について述べることもなかったということであろう。

第三にあげるのは、金力に伴う責任ということである。ここでもやはり、聴衆が富裕な階級にあるものが多いことを意識して述べている。夏目が金力すなわち金銭の持つ力として最も注目するのは、「人間の精神をかう手段に使用出来る」<sup>(28)</sup> ということである。

そのために、金力を有する者は、金力の及ぼす影響についての認識があり、その上に立って責任ある金力の行使を行うのでなければならぬと述べる。「責任を以てわが富を処置しなければ、世の中に済まないと言うのです。いな自分自身にも済むまいというのです」<sup>(29)</sup>

金力の行使を権力や権利の行使と同列に論じるころは、夏目独特の個性のあらわれと見ることができる。とくに、金力の行使に伴う責任を論ずる場面で、もし責任を以て金力を行使しないばあいは、「自分自身にも済むまい」と考えるところに夏目の独自性があらわれている。彼によれば金力の行使という一種の経済行為は同時に人格を介在させる行為である。そうであるならばそれは人格行為である。ところで、責任なき人格行為は存在し得ないことから、そのような行為は人格の否定、自己の否定につながることになる。夏目は考えるということである。ここに見られる夏目の論理展開はやゝ難解である。

当時個人主義ということばは誤解の余地なく正確に認識される保証のあるものではなかった。そのため、夏目はさまざまな事例をあげて解説しなければならぬと考えていたことが随所にうかがえる。次にあげるのはその一例である。

「私のこゝに述べる個人主義というものは、決して俗人の考えているように国家に危険を及ぼすものでも何でもないので、他の存在を尊敬すると同時に自分の存在を尊敬するというのが私の解釈なのです。立派な主義だろうと私は考えているのです。もっと解り易く云えば、党派心がなくて理非がある主義なのです。朋党を結び団体を作って、権力や金力のために盲動しないという事なのです。夫だから其裏面には人に知られない淋しさも潜んでいるのです。」<sup>(30)</sup>

この講演が「私の個人主義」となっていることを考えるならば、夏目の講演は彼独自の個人主義についての認識を述べているものであって、決して個人主義について的一般論を

述べることに主旨があるものではないことは明らかである。それだけに、「其裏面には人に知られない淋しさも潜んでいるのです」と言わせるような情緒的ことばが挿入されることにもなるのである。すなわち、彼自身、個人主義の立場に立って日常的に生活する場面において淋しさを体験することのあるのを告白しているということでもある。

この講演の結言として述べている次のことばは彼の素朴な気持を率直に表明しているものである。

「私は折角のご招待だから今日まかり出て、出来る丈個人の生涯を送られるべき貴方がたに個人主義の必要を説きました。是は貴方がたが世の中へ出られた後、幾分か御参考になるだろうと思うからであります。果して私のいう事があなた方に通じたか何うか。私には分かりませんが、若し私の意味に不明のところがあるとすれば、夫は私の言い方が足りないか又は悪いかだろうと思います。」<sup>(31)</sup>

『私の個人主義』と題する講演を行った数年前に「自己本位」ということばの意味を『道楽と職業』と題し明治四十四年八月に行った講演の中で、夏目は次のように解説している。

「己の為にするとか人の為にするとかいう見地からして職業を観察すると、職業というものは要するに人の為にするものだという事に、どうしても根本主義を置かなければなりません。人の為にする結果が己の為になるのだから、元はどうしても他人本位である。」<sup>(32)</sup>と、まず「自己本位」の対極にある「他人本位」ということばを職業の持つ属性としてあげ、その職業の中では例外的に自己本位でなければ成立しない職業のあることを彼はあげて次のように論じている。

「ただここにどうしても他人本位では成立たない職業があります。それは科学者哲学者もしくは芸術家の様なもので、是等はまあ特別の一階級とでも見做すより外に仕方がないのです。」<sup>(33)</sup> これらの例外的と言える職業は、「職業として優に存在し得るかは疑問として是は自己本位でなければ到底成功しないことだけは明かな様であります。何故なれば是等が人の為にすると己というものの無くなって仕舞うからであります。中略。たゞ人に迎えられたい一心で遣る仕事には自己という精神が籠る筈がない。凡てが借り物になって魂の宿る余地がなくなる許です。」<sup>(34)</sup>

この後で彼は自分の職業は芸術家であると一応規定し、文脈上、自分の職業人としての立場は「自己本位」の立場となることを論じている。

夏目は自身が、文芸の作家と言う職業人であると規定し、しかも文芸の作家という職業は本来的に自己本位の立場に立つことによって成立つものであると解するのである。この講演を行った時、夏目は既に朝日新聞社に所属する作家として、『虞美人草』（明治四十年）、『坑夫』（明治四十一年）、『それから』（明治四十二年）、『門』（明治四十三年）を発表するという実績をあげているので、この講演内容が持ち得る説得力は、その聴衆が夏目の作品に親しむ度合いに比例するものであったはずである。

作家として実績を残した時点での夏目の「自己本位」という立場についての認識を見て来たところで、彼が作家になる前では、どうであったかを次に検討したい。

吉田六郎は『作家以前の漱石』の中で、夏目がイギリス留学中に化学者池田菊苗に啓発され、「英文学の研究を、単なる個人的道楽の域から押し進めて普遍妥当な、万人の共有財産とする」<sup>(35)</sup> ことを自己の使命と考えるようになったことは研究者自身が法則を持

つこと、すなわち、「思想的有機体たる我を我として自覚すること」<sup>(36)</sup>であったとする。そして、その自覚のためには、それを最も妨げる要素である模倣、とりわけ西洋への模倣から脱することが必要で、それが出来た時「最後の目隠しが眼から落ちた」<sup>(37)</sup>と見ている。その自覚は、「日本人たるの自覚」<sup>(38)</sup>によって象徴されるというのが吉田の見解で、この自覚に夏目は「自己本位という名前を与え、本然の自己としていい表わ」<sup>(39)</sup>していると見る。

夏目の「自己本位」志向の萌芽を早い時期に認めるのは瀬沼茂樹で、瀬沼はその著書『夏目漱石－近代日本の思想家－』の中で、夏目が帝国大学文科大学英文科学生であった明治二十四年に同じく帝国大学文科大学国文学科学生であった正岡子規との交流時に見せている主張にその萌芽が認められるとする。

瀬沼があげているのは、明治二十四年十一月七日付の夏目が正岡常規（子規の本名）に宛てた書簡に見られる次の箇所である。

「小子は賢愚無差別高下平等の主義を奉持するものにあらず己より賢なるものを賢とし己より高きものを高しとするに於ては敢て人に遜らす」<sup>(40)</sup>

ここに見られる夏目の「己」を基準にして対象の賢か愚かを決め、また、高か下かを定めるという見識が示されているところに注目して瀬沼は、すでにこの時期に後年夏目が唱えるところの「自己本位」の考え方が示されていると見るのである。

夏目が学生時代に親交を深めつゝあった正岡に宛てた、あくまでも私信であって、公的に発表される性質のものではない書簡の中で記したものであることを考えると、そこに格別の意味を見ようとするに疑義を抱くことはできる。しかし、一方では、私信の中においてさえ、いわば人生の原理にあたるような人間観を表白する程のこだわりが夏目にはあったと見るならば自ずから評価は変わってくる。

このばあい、瀬沼の指摘するように、夏目の「自己本位」すなわち尺度の基準を自己に置くという考え方がすでに見られる事例としてとりあげるのは妥当であると見たい。

ここに取り上げた夏目の正岡に宛てた書簡には「自己本位」ということばが一度も用いられてはいない。しかし、「自己本位」と解釈してよい考え方が見られるということである。そういう意味からこのことばを考えると、夏目には更に以前からその萌芽が見られるとも言える事実を見出すことができる。

明治四十一年九月発行の『文章世界』に彼は「處女作追懷談」を寄せており、その中に彼が自身の十五六歳の頃を追懷して次のように述べている。文学をやりたいと告げた兄に文学は職業とならないと叱られたことに対して彼は、「然しよく考えて見るに、自分は何か趣味を持った職業に従事して見たい。それと同時にその仕事が何か世間に必要なものでなければならぬ。何故というのに、困ったことには自分はどうも変物である。当時変物の意義は良く知らなかった。然し変物を以て自ら任じていたと見えて、逆も一々此方から世の中に度を合わせて行くことは出来ない。何か己を曲げずして趣味を持った、世の中に欠くべからざる仕事がありそうなものだ。」<sup>(41)</sup>と考え、種々思いめぐらして建築をやることに決めた。そこで、高等学校同級生で夏目の友人米山保三郎<sup>(42)</sup>という変物から将来の希望を聞かれて決めた方向の話をする。それを米山は簡単に否定し「それよりもまだ文学の方が生命がある」<sup>(43)</sup>と言われ、これに敬服した彼は文学者になることを決めたというので



ある。文学の中では英文学をやることにしたというのが彼の英文科志望の経緯であった。

以上に見られるように夏目が述べる英文科志望の経緯は、必ずしも明確な道筋が認められるようなものではなく、その限りでは「自己本位」の考えが明確な形でとらえられるものとはなっていない。しかし、注目すべき箇所がある。それは、彼が自分自身を「変物」と認識し、それ故に「此方から世の中に度を合せて行くことは出来ない」と自己を分析しているところである。ここに夏目の青年期においてすでに見られる「自己本位」の考え方の原型をみることができる。

## 結 言

以上見て来たことによって明らかなように、夏目においては「自己本位」ということは、彼の思想や生活の基底を貫く原理を呼ぶに価するものであったと言える。しかもその原型は彼の人生のかなり早い時期より見られるものであった。しかし、それを貫くことは彼の身边や精神面にさまざまな影響を及ぼし、そのことによって彼はその思想や生活に彼の独自性ともいえる特性を発揮することになる。

それを教師生活について見る時、彼の信念ともいうべき「自己本位」の姿勢による教育が必ずしも学生や生徒によって全面的に理解されないということがあっただけに、「自己本位」の姿勢は無条件に、それ自体を善として貫くということについては彼自身、絶対的な自信を持ち得なかったということも見えて来た。

しかし、それでもなお彼にとっては「自己本位」は思想や生活の原理であったということに彼の教師としての苦悩の根源があったとも言えるのである。

### (注)

- (1) 吉村善夫, 夏目漱石, 春秋社, 昭和五十五年, P.7.
- (2) 中島文雄編, 岩波英和大辞典, 岩波書店, 1978年, P.531.
- (3) 夏目漱石, 文展と芸術, 漱石全集第二十一卷所収, 岩波書店, 1979年, P.93.
- (4) 同前書, P.94.
- (5) 同前書, P.102.
- (6) 瀧澤克己, 夏目漱石, 清水書房, 昭和二十一年, P.3.
- (7) 同前書, P.362.
- (8) 森田草平, 夏目漱石, 甲鳥書林, 昭和十八年, P.6.
- (9) 夏目漱石, 私の個人主義, 漱石全集第二十一卷所収, 岩波書店, 1979年, P.139.
- (10) 同前書, PP.140 ~ 141.
- (11) 同前書, P.141.
- (12) 小宮豊隆, 夏目漱石, 岩波書店, 昭和二十四年, P.381.
- (13) 夏目漱石, 書簡, 漱石全集第二十七卷所収, 岩波書店, 1980年, P.153.
- (14) 夏目漱石, 日記, 漱石全集第二十四卷所収, 岩波書店, 1979年, P.55.
- (15) 夏目漱石, 私の個人主義 (前掲書), P.141.
- (16) 同前書, P.142.
- (17) 同前書, P.142.

- (18) 夏目漱石, 文学論, 漱石全集第十八卷所収, 岩波書店, 1979 年, P.10.
- (19) 同前書, P.10.
- (20) 同前書, P.13.
- (21) 荒正人, 夏目漱石, 理代作家論全集第三卷, 五月書房, 昭和三十二年, P.38.
- (22) 小宮豊隆, 夏目漱石 (前掲書), P.449.
- (23) 夏目漱石, 私の個人主義 (前掲書), P.144.
- (24) 同前書, P.146.
- (25) 同前書, PP.146 ~ 147
- (26) 同前書, P.145.
- (27) 同前書, P.147.
- (28) 同前書, P.148.
- (29) 同前書, P.149.
- (30) 同前書, P.152.
- (31) 同前書, P.157.
- (32) 夏目漱石, 道楽と職業, 漱石全集第二十一卷 (前掲) 所収, P.26.
- (33) 同前書, P.27.
- (34) 同前書, P.29.
- (35) 吉田六郎, 作家以前の漱石, 勁草書房, 1966 年, P.207.
- (36) 同前書, P.208.
- (37) 同前書, P.208.
- (38) 同前書, P.208.
- (39) 同前書, P.209.
- (40) 夏目漱石, 書簡, 漱石全集第二十七卷 (前掲) 所収, P.34
- (41) 夏目漱石, 處女作追懷談, 漱石全集第三十四卷所収, 岩波書店, 1980 年, P.163.
- (42) 明治三十年没, 円覚寺管長の今北洪川より天然居士の号を受く。
- (43) 夏目漱石, 處女作追懷談, 漱石全集第三十四卷 (前掲) 所収, P.164.

追記：引用文中の旧漢字、旧仮名は可能な限り新漢字、新仮名に改めたことをことわっておきたい。